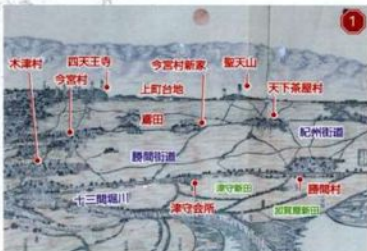


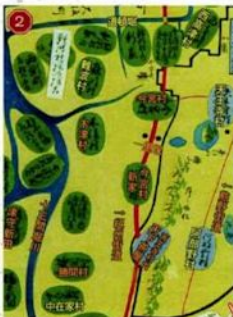




# 西成区の歴史



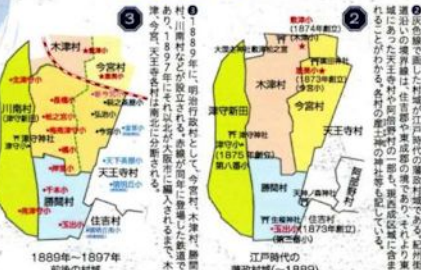
①大漢一覧(1834年制作)による江戸時代後期の鳥瞰図。いくつかの藩政村集落や田畑の広がり、紀州街道、勝間街道や十三間堀川、数多く造成された新田の広がりがよくわかる。



②住吉名勝園会(1794年制作)から見た、今宮村から天下茶屋に至る紀州街道沿いに南に下った沼道描写である。絵図の左が北で、今の恵美須町から天下茶屋、天祐ノ森までを抜き出した。



③大漢一覧(1834年制作)の鳥瞰図に描かれた西成郡全体へ入る西成区エリアの状況。大東郡の地を北境を南を取り囲む形で、緑色の村々で構成される西成郡が描かれている。拡大図では、今の西成区を構成する江戸時代の村々が見える。今宮、木津、勝間、中在家の諸村、津守新田に加え、阿部野村、天王寺村が関連していた。



①1907年測量の地形図をもとに、現西成区に關わる江戸期の藩政村である。今宮村、木津村、津守新田、勝間村。

阿部野村、天王寺村などの周辺(参考まで)に現在の小学校の位置を描いている(2015年3月開校になった小学校も含めて)。1889年の市町村再編施行で、天王寺村となつた阿部野村や、川南村となつた津守新田は、複数の藩政村と合併して明治行政村を構成する大字となつた。それ以外の今宮村、木津村、勝間村は規模が大きかったとあつた。そのまま明治行政村として受け継がれ、その後、1889年の市町村再編で、1889年に、各色品線より以北は大東市域に編入された。

④大東市へ編入した大東市町村の村域を色で表した。分村や新設した町村など、大東市町村の村域を色で表した。分村や新設した町村など、その一部は現西成区域と重なる。新設した川南村など、その一部は現西成区域と重なる。この文書には、川南村が新設された。各町村には、江戸時代の藩政村の集落や田畑の広がりがよくわかる。



④大東市へ編入した大東市町村の村域を色で表した。分村や新設した町村など、大東市町村の村域を色で表した。分村や新設した町村など、その一部は現西成区域と重なる。新設した川南村など、その一部は現西成区域と重なる。この文書には、川南村が新設された。各町村には、江戸時代の藩政村の集落や田畑の広がりがよくわかる。





1903年頃から急速に市街地化した小字釜ヶ崎の宿が並ぶ風景である。現在の西成警察署から北に二街区目の道路を東から西にみたまのものである(1924年頃)。



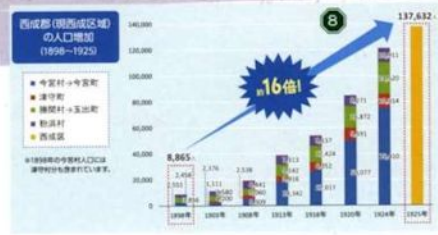
1 津守村に立地した最大規模の工場である当時の大日本紡績津守工場の遠景(1924年頃)。戦災で焼失し、現在は西成公園、西成高校になっている。



4 1919年刊行の「大阪市内および内閣村番地入地図」では、紀州街道の沿いの集落を扶んで、東側の天王寺村と、西側の今宮村で、日本最大級の耕地整理が行われたことがよく見てとれる。



5 飛田新地設置(1917年)以前の畑地の広がる山王エリアを南から北を見た風景である。④畑園にある天王寺村の耕地整理地区にあり、この整理地区に生まれた飛田新地により、その後一気に市街地化する。



3 1912年に創設された大阪自衛團の本拠、共同街宿所でありもと今宮小(閉校)前の紀州街道に面する芝間まわりの状況となっていた。

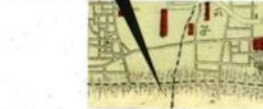


1 1924年に刊行された大阪バノナマ地図であり、現西成区北部の市街地がかなり明かに描かれており、④で示した今宮村耕地整理で、北西部の矩形の市街地の登場がよくわかる。また、衝突も多く描かれており玉場の進出がよく見てとれる。



7 生利神社には新子の方が1970年に撮った「だんじり」があり、1907年ごろの写しの趣意が感じられる。当時の市街地を写している1張の「だんじり」は、前山島までの飛行場建設の完成後に当時の家賃が倍増したため、被災を免れた。

8 現西成区を構成する、当時の今宮町、玉出町、津守町、粉浜村の人口の急増状況を描いたもので、明治中期の人口に比し、実に16倍となっている。中でも東京の渋谷町、西栗町、滝野川町と並んで日本最大規模人口の町となった今宮町は、約30倍の人口増を示していた。



1 現在南成区(地区)1885年車載道路、1895年1889年軌道の交差する新今宮の1889年8月の状況である。戦後近年の新しい鳥の公園敷地が南を写真しようとするまで、踏ぐことになった。その名の通り、1900年刊行の改正大阪市明長新地図で、見られるように、上町地に編み込まれた天王寺駅を出て西の低地になつてきた今宮駅にかけて、城壁のような土手が延々と出来てしまつたのである。



10 本津川とその土手の明治30年代中頃の状況である。多くの新船が往来している。土手ははげが植えられていた。

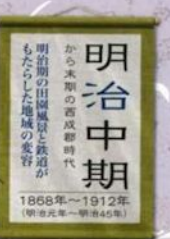
2 紀州街道を以て天下茶屋の明治30年代の状況であり、この地茶屋の本拠は戦災で焼失し、現在の天下茶屋公園にある。



5 1885年に開通と同時に南海鉄道(当時の社名)に南海鉄道(南海)が開設する。1895年刊行の「大阪市明細地図」では、天下茶屋公園や聖天、阿部野社の記載が見とれる。



9 本津川堤から東を見た津守新田の明治30年代中頃の写真である。新田の向こうに十三層閣の上まきがあり、さらに奥に三軒の建、聖天宮とよく見られる。



6 ④の東淀川開大正市街全国(1912年)刊行では1898年の大阪府による大阪府外での木賃宿地区指定により、今宮村小字釜ヶ崎を中心に木賃宿が急速に進出している。津守工場の進出による市街地化の進行が始まった状況がうかがえる。1907年に阪電化された、新たに設置された南海鉄ノ茶屋駅付近の状況、おしやな駅舎があった。



8 南海鉄道を跨いで高野鉄道の原真稲穂車庫の列車が通っている。1907年頃の状況である。当時交通手段に駅は設置されて、自衛隊は、この地帯をその中心(南成)に警備隊(のちの阿部野田)を設けていた。

# 昭和戦前期

1926年～1940年  
(昭和元年～昭和15年)

西成区誕生の  
大大阪の登場で発生した  
西成区と都市計画の始動

① 1925年、大大阪誕生のときに西成区や西淀川区、東淀川区が東淀部から分かれて設置された。同時に東成区、住吉区もそれぞれ東成部、住吉部域でもって設置された。南に残された西成部域が小さかったため、西成区はほぼ今の範囲の小じまりとした。そして大出、山王、飛田、天下茶屋、岸里の4部は住吉区で、粉浜は西成区であった。今の形になるのは1943年であり、この時に阿倍野区が住吉区から分けて誕生した。



⑤⑥⑦ 1924年頃、当時の今宮町役場(⑤)の写真の旧西成区役所)屋上から撮影した密集市街地の写真。わずか10年ほどで驚く海となっていたことがわかる。⑧は東方を望み、南海電車をはさんで遠方は現在の



の萩之茶屋エリアにあたる。⑨は西方を望み、現国道3号線建設以前の、花園町、旭通エリアにあたる。⑩は南方を望み、南海本線線路が見える。さらに遠方は、天下茶屋厚田道にあたる。



⑥ 大大阪区勢地図。最新の西成区(1936年刊行)裏面に載せられた内容である。当時の主要官庁、学校や主要工場、商店、土庫合衆、医院、娯楽施設、神社の紹介がある。当時の外観を真からものがうかがうことが、下出市民面や玉出所などの写真は貴重である。

# 昭和戦前期

1926年～1940年  
(昭和元年～昭和15年)

西成区誕生から  
大大阪市南進計画の  
ダイナミズムを展覧

① 鉄道交通網の整備はますます進展し、南海では全国初の高層複々線化が行われ、難波駅から天下茶屋駅までの区間が1938年に完成。萩之茶屋駅付近の高層化工事中の写真である。② 地下では現調受動線の難波から天王寺への延伸工事がすすみ、写真は山王地区から天王寺方面をみた1937年撮影の開通工事中のものもある。通りに当時は大鉄百貨店現丸が見える。1938年に区内では初の地下鉄動物園前駅が誕生した。③ 1942年には現国道3号線直下に通町7橋線の大岡町くわ花園町が開業する。



④ 1940年に津守に完成した大阪市最初の下水処理場の敷地上空から、西成区方面を望んだ写真。下水処理施設や本屋のモダンさは特筆すべきものであった。新設駅電車の走る現新なにわ筋の津守神社の森や、その向こうの林となっている津守新田会所(その後の津守小学校)や、そのまわりの津守の市街地化、さらに十三間堀川の向こうの現在の梅南、松、橋方面の工場地や、市街地化の進展ぶりが大変よくわかる。

▲ 近辺の町名  
▲ 西成区 昭和15年 誌

# 戦時中から 戦災復興期

戦災復興事業による  
西成地区の改変と戦後の再建

1941年～1955年  
(昭和16年～昭和30年)



1 秩之若尾南公園 通称三角公園の1954年の写真京都市計画公園として敷地は確保され、高整備が始まっている。南海天王寺支線の電車と海沿い防壁の火の見やぐらが確認できる。



2 当時の国鉄は長らく西成区内鉄道線を設けておらず、写真は1952年撮影のものであるが、現今宮駅の南海との交差点付近か、天王寺方面を望んだのかなた状況が見とれる。複線であるが、駅が新設されるのは昭和36年開通する1966年になった。



4 1954年撮影の花御町に登場していたスーパーマーケット。



1942年

1953年



3 戦時中に工事がストップしていた国道26号線下の地下鉄建設が再開され、花御町より再岸里・玉出と延伸された。写真は1944年の岸里駅の写真である。



5 1956年撮影のアーケードが未設置の鶴見橋商店街。戦関係の商店でざわついている状況が見とれる。



6 1950年9月のジェーン台風は、高潮被害が激しく、西成区では十三間瀬川以西の津守地区が冠水してしまう。その時の津守小学校の災禍の写真である。

7 中世以来の歴史ある餅問村の系譜を有する玉出地区の空襲で焼失する前の1942年の状況。戦災復興事業の進行中の1953年の状況と比較したものである。水色線で描き込んだ飛煙路の中に生肌神社と四ヶ寺(国中赤寺)の存在、東西を貫く水通りや、十三間瀬川を西にした旧集落と、その周りにはほとんど区別がらずに市街地化が進行していた。歴史的集落はほぼ消失してしまっただが、元の玉出中その近隣の神社は復興した。しかし当時の写真は無い。また下図では新設の玉出中の敷地や、玉出西公園の敷地が目立つ。玉出小は講堂が外焼失を免れ、玉出市民館は公園になった。



4 大阪市で1948年8月9日9月には半蔵院学園建設が始まった。各校区は大部分、空襲の大被害を受け、隣接する山手町の北部が取り直りた。



# 戦時中から 戦災復興期

戦時の対応と  
空襲による災禍

1941年～1955年  
(昭和16年～昭和30年)

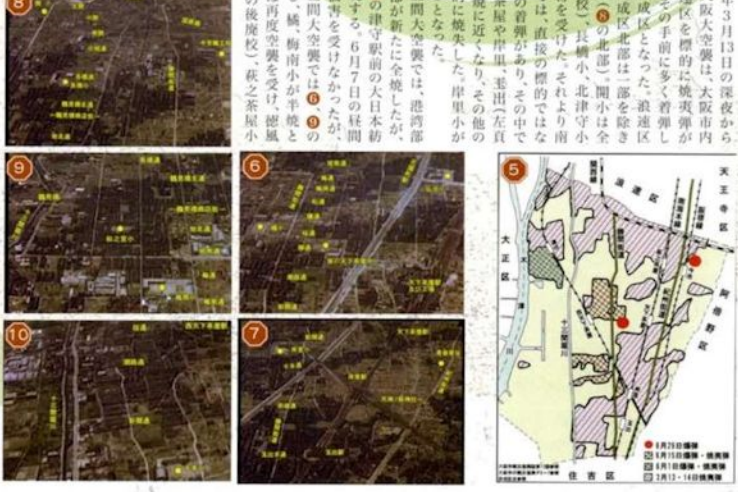


2 戦時中の千本の新開通。岸里小学校北門前にて出征兵の見送りの様子。道沿いの川に散敷で写っている球も見える。

3 湖路当時の柳道での早期ラジオ体操。戦時中の撮影で、健康増進という本来の目的に加え、国民精神発揚の効果も期待されたであろうが多くの子どもに遊ばれている。

4 木津川筋の造船は、戦時中は軍需に 대응する操業にフル回転となっていた。写真は1944年撮影の進水式であり、木津川の対岸の大正区の工場街も見とれる。

5 1944年5月3日13日の深夜から14日未明の大阪大空襲は、大阪市内が投弾された。その手前にも多く着弾したエリアが西成区となった。浪速区に隣接する西成区北部は一部を除き全焼となった。6の北部、開小は全焼。7の被爆校、長崎小、北津守小は半焼。8の被爆校、長崎小、北津守小は半焼。9は全焼に近い。10の地区も部分的に焼失した。岸里小が半焼。7も焼失となった。津守小や大阪市北部の新興では、港町部や西成区では津守駅前の大日本紡績工場が全焼する。6月7日の昼間大空襲では被害を受けなかったが、6月15日の昼間大空襲では6の中部が焼失し、梅南小が半焼となった。北部は再度空襲を受け、密風小が全焼。その後長校、秩之若尾小も半焼となった。千本小も3月と6月の空襲にフル回転となっていた。写真は1944年撮影の進水式であり、木津川の対岸の大正区の工場街も見とれる。



● 空襲目標地  
■ 空襲被害地  
■ 空襲被害地  
■ 空襲被害地